

あおぞら通信



サービス事業所開設へ向けて 職員研修

聖母の家学園福祉会は、障害者サービス事業所を平成31年度春の開設を目標にしています。そこへむけて運営のシミュレーションと仕事づくりや就労支援の視点で、夏休み中に研修を行いました。運営のシミュレーションは伊賀市にある社会福祉法人伊賀聳会 太陽作業所様にご教授いただきました。また仕事づくりや就労支援については、名古屋市にある中部電力の特例子会社 中電ウイング様の見学をさせていただきました。これまでも地域でがんばっている先輩事業所様に貴重なお話を聞かせていただいています。聖母の家学園福祉会は、開設のスタートラインに乗れるように準備をすすめています。

運営シミュレーション

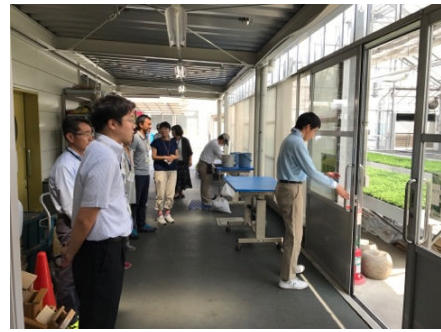
就労移行事業と就労継続B型事業の多機能型でスタートするか、就労継続B型のみでスタートするか、両方のパターンでシミュレーションを太陽作業所様に示していただきました。給付金や加算、人件費や管理費の計算を一つずつ数字にしていきました。また聖母の家学園の給食を作る活動想定して、工賃や原材料費などのシミュレーションをしました。

シミュレーションの結果、初めて事業所を開設するのであれば、就労継続B型のみでスタートするほうが無理がないことが見えてきました。また初年度の損益分岐点も出し、事業の規模が見えてきました。

仕事づくりと就労支援

聖母の家学園は障がい者雇用をはじめて3年目です。まだ一人しか雇用できていませんが、中電ウイング様は75名の障がい者が働いています。事業所の規模がちがいますので数字だけでは比べられませんが、一人ひとりが大切なスタッフであることは変わりありません。

中電ウイング様の仕事は、自社で使用する製品や作業がほとんどです。自分の仕事の行き先が見やすいのもあると思うのですが、自分の仕事の誇りを持っているようでした。そのため製品の一つずつに愛情を込めていることが伝わってきました。日常生活の力・働く気持ち・人間性の豊かさが高まりつながっていくことで、仕事を続けられる力がついてくるそうです。聖母の家学園が大切にしていることにもつながりますし、福祉会の理念にも通じ、就労継続B型の支援内容につながるヒントを得ることができた研修でした。





一緒に活動する、一緒に働く という選択

9月1日、聖母の家学園の2学期がスタートしました。この日は始業式とホームルームの11時下校です。夏休み中は休業していた四日市メリノール学院様での昼食パンの販売もこの日から再開しました。聖母の家学園が四日市メリノール学院さまでパンの対面販売をするのは、火曜日と金曜日です。これまでは聖母の家学園で働くダウン症の女性が担当していましたが、この日は11時下校ということもあり、高等部専攻科NEXTの学生も販売活動を体験することにしました。11半ごろパンを仕入れに行き、12時過ぎにメリノール様に着き準備をして、12時35分のチャイムが鳴ると生徒たちが次々と販売ブースに来てくれます。仕入れたパンはあっという間に生徒たちの手に取られ支払いの列ができます。この日は20個のパンで15人ほどの生徒が並びました。およそ15分で終了でした。パン値段は、1個130円です。生徒が手に持つパンを見て「2個で260円です」。そして生徒から支払われたお金を見てお釣りを計算します。暗算でできる額もあれば、難しければ早見表で確認します。写真の二人がお金の受け渡しをして、後ろの背の高い学生が列の整理をします。この写真はその場面です。引率した私は、ほとんど見守るだけでした。早い計算、テキパキしたやり取りとはいいたいですが、その時間に笑顔で待っていてくれるメリノールの学生たちにも感謝です。

聖母の家学園福祉会は、特別支援学校卒業後の活動の場を作っていきますが、このように社会人と学生と一緒に活動や働くことができる時間や選択があってもよいのではないかと、このパン販売活動を通して思いました。支援職員が仕事を教えリズムを作っていくことも大切なことですが、先輩が働く姿を見て後輩が学ぶ、後輩に伝えるために先輩が技術を高めるという成長のスタイルがあってもよいのかと思います。このような場面から聖母の家学園福祉会の4つの柱「つくる」「そだつ」「くらす」「つなぐ」を具体的に考えていきたいです。